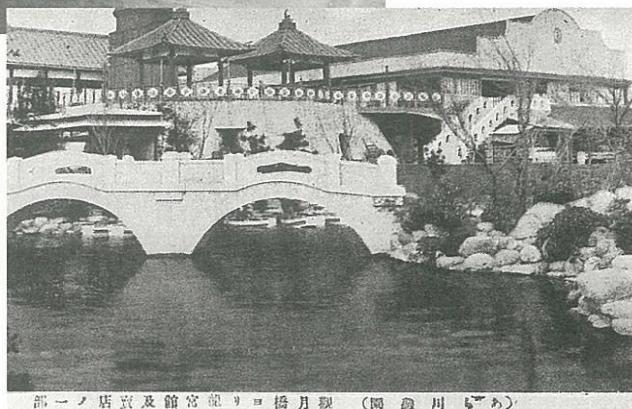




● 小台橋保育園西側の煉瓦塀

「あらかわ遊園絵葉書」  
観月橋ヨリ竜宮館及売店ノ一部

(当館蔵)

# 荒川ふるさと 文化館だより

荒川区教育委員会  
荒川ふるさと文化館  
荒川区南千住 6-63-1  
TEL 03(3807)9234  
登録 (18)0032-2号

## 文化財 NEWS速報

### 尾久の煉瓦塀を めぐつて

— 煉瓦工場とあらかわ遊園 —

西尾久六丁目のあらかわ遊園近く、歴史を感じさせる煉瓦塀が民家を取り囲んでいます。その風格からか、「この煉瓦塀は何か」という問い合わせがしばしば寄せられます。実は、この煉瓦塀は、あらかわ遊園とかつて尾久にあつた煉瓦工場に、深い縁のあるものなのです。

荒川（現隅田川）付近では、良質な土が得られ、物を運ぶのに便利な舟運を利用できることから、明治以降煉瓦工場が数多く設立されました。その一つが王子町船方（西尾久六丁目36番地付近、現あらかわ遊園内）にあつた広岡煉瓦工場（後の王子煉瓦株式会社）です。

広岡煉瓦工場の経営者であつた広岡幾次郎（後の広岡勘兵衛）は、阿山郡上野町（三重県伊賀市）の出身で、志を持つて上京しました。明治30年（一八九七）、洲崎養魚場（江東区）の養魚池の掘削を行い、その残土を有効活用するため煉瓦製造を始めたそうです。その場所が、現在あらかわ遊園がある西尾久六丁目36番地付近と考えられます。残念ながら、地元の土を利用したという記録は現在のところ発見されていませんが、対岸の江北村大字小台（足立区）で採れた原料の土を運ぶため、軽便軌道の敷設

を願う文書が東京都公文書館に残っています。

大正6年（一九一七）、窯を新設し經營を拡大した煉瓦工場でしたが、同10年に火災で工場を焼失してしまいました。そこで広岡は、煉瓦工場の跡地を利用して遊園の経営に乗り出しました。遊園の開園には、広岡を始め、地元の有力者の尽力があつたといわれています。

当時を知る石神寅松氏（故人）の手記によると、道路との境にあつた木造の塀を煉瓦塀に変え、園内には滝や池などを整備したといいます。現在、尾久に残る煉瓦塀はこの時の遊園の煉瓦塀だと考えられます。もしかしたら、広岡の工場で作られた煉瓦が使用されたのかもしれません。

さて、遊園の煉瓦塀であるにもかかわらず、現在煉瓦塀は遊園に隣接していないません。なぜでしょうか。それは遊園の歴史とも関係があります。

広岡の死後、遊園は経営難に陥り、王子電気軌道株式会社に経営は委ねられました。昭和16年（一九四一）には、用地として遊園内に高射砲台が設置され、戦後、煉瓦塀の西側と北側は宅地になり、それ以外の敷地は区立の遊園地として昭和25年に新たな歴史を刻みはじめたのです。尾久の煉瓦工場とあらかわ遊園の二つの歩みを物語る煉瓦塀。今後とも、地域の歴史を伝える文化財として後世に残していきたいものです。

（加藤陽子）

## 着せ替え地蔵

…企画展こぼれ話…  
(その 2)



り、当時の人がびとも目を丸くしたようだ。  
また次のようにある。

**戦闘帽のお地蔵様—南千住小塚原の回向院に鎮**  
坐します雨ざらしの地蔵様が最近  
「杉田玄白と小塚原の仕置場」展は、3月11日に無  
事終わった。おかげさまで、5、132人のお客様  
をお迎えすることができた。

さて、この展示で終始大活躍いたいたのが首切  
地蔵と呼ばれるお地蔵さんである。展示のポスター  
にもご登場を願つた。仕置場の象徴的な石造物であ  
り、二〇〇年以上にわたり、じつと座つて南千住と  
いう地域の変遷を見てきた存在である。

ここで紹介するのは新たに知つた、ちょっと見慣  
れない格好をした首切地蔵である（写真）。「間違  
探し」のようだが、見慣れない箇所は3つある。一  
つは帽子、もう一つは襷。最後に宝珠の前に置かれ  
た札である。これについては残念ながら、新聞記事  
の写真のため何が書いてあるのかはわからないが、  
帽子は陸軍の星のマークがついた戦闘帽である。襷  
の文字は「民精神」と読める。

この写真は、「東京朝日新聞」の昭和13年  
(一九三八) 5月4日号に掲載されていた。直ちに  
生じる疑問は、なぜこのような姿をしているのかで  
ある。見出しには、「軍国のお地蔵さま」「戦闘帽  
に白襷も勇しく 小塚原回向院の一点景」、という  
文字が踊る。記事には、参詣人を驚かせているとあ

どうやら襷には、「国民精神総動員」と書かれて  
いたらしく、この姿は、昭和12年8月24日に制定さ  
れた国民精神総動員法  
に由来するそうだ。荒

川区の同運動は、東京  
府国民精神総動員運動  
の一環として行われた  
(以下、「荒川区教育史」  
資料編Ⅱ)。府会議長、  
町村長会長、知事、各  
部課長、府、市、警視  
庁などの実行委員会を  
設け、各青年団などの  
協力を得て行われた。  
時局認識運動、銃後援  
援強調運動、貯蓄奨励



『東京朝日新聞』第 18,703 号  
昭和 13 年(1938) 5 月 4 日 (国立国会図書館蔵)

中村屋半六の名前も見える。造立の趣旨も台座に刻  
まれている。「天下泰平」「國土安穩」とある。ここ  
仕置場の地に埋葬される人びと、つまり「無縫」と  
して葬られた刑死者や行き倒れ人といった非命の死  
を遂げた人びとの菩提を弔うことによって、「天下  
泰平」を祈願する、というところであろうか。そも  
その首切地蔵の役割はこの辺にあつた。

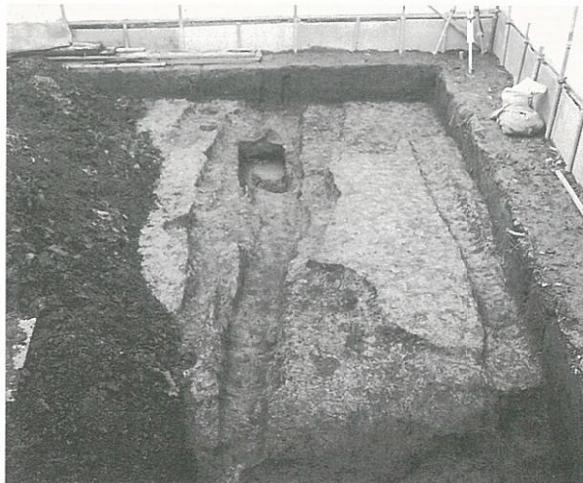
実際、この地に埋葬されている者を弔いに訪れる  
人びとは、必ずこの地蔵の前で手を合わせたとい  
うが、仕置場が機能を終え、明治20年代になると、そ  
れを遂げた人びとの菩提を弔うことによって、「天下  
泰平」を祈願する、というところであろうか。そも  
その首切地蔵の役割はこの辺にあつた。

運動、消費節約・廃品回収献納運動が主なものであ  
る。これらの運動をアピールするため、「附近の一  
信者」が首切地蔵にも一役買つてもらつたというと  
ころであろう。

江戸時代、昭和13年、そして今、それぞれの様子  
を振り返ってみると、時代の風潮とともに、その都  
度衣を着せ替えられるかのように、首切地蔵が新た  
な役割を与えられてきたことがよくわかる。それで  
も首切地蔵は、ただただ慈悲深い眼差しで地域の移  
り行く様を見守り続けている。

（亀川泰照）

# 土の中区② 町屋四丁目実揚遺跡 B 地点の発見



調査地全体（真ん中に見えるは溝）

平成 18 年 11 月、平成 17 年に調査が行われた「町屋四丁目実揚遺跡」と一連の遺跡と考えられる遺跡の発掘調査が行われました。

前回の調査地（A 地点）より北西にわずか 100 メートルほどのところにあり、弥生時代終わりから古墳時代前期のものを含んだ溝や近世の溝、土坑などの遺構、弥生土器、土師器、須恵器、近世の陶磁器片などが発見されました。遺構や出土した遺物、土の堆積の状態等から、「町屋四丁目実揚遺跡」に関する遺跡と判断し、「町屋四丁目実揚遺跡 B 地点」という名称になりました。

ちなみに A 地点では、弥生時代末頃から古墳時代前期の溝や周溝、井戸跡等が発見されています（荒川ふるさと文化館だより）第 15 号参照）。



発掘作業風景

遺跡が発見された一帯は、石造物や伝承等から、中世の頃から人びとが住んでいたところとして知られていますが、周知の埋蔵文化財包蔵地ではありませんでした。平成 7 年、中世の宝篋印塔（区指定有形文化財）の調査時に、縄文土器、弥生土器、板碑などが出土したため、周知の包蔵地となつたのです。さらに平成 17 年度の調査ではこれまで確認されなかつた古墳時代の遺跡も検出しました。

今後、町屋四丁目実揚遺跡の調査結果の分析が進めば、下町の原始・古代の姿が明らかになつてくるでしょう。B 地点の調査報告書はこれから整理作業が行われる予定ですので、こうご期待。

尚、平成 17 年度に調査した町屋四丁目実揚遺跡の出土品は、平成 18 年度に区登録有形文化財（考古資料）となりました。この発掘調査報告書は、荒川区内図書館等で閲覧・貸し出しできますので、ご興味ある方は、ぜひご覧下さい。（八代和香子）

荒川区内のおもな遺跡一覧				
番号	所在地	遺跡名（種別）	時代	備考
1	西日暮里 3 丁目全域	諏訪台・日暮里延命院貝塚遺跡群（包蔵地・貝塚）	縄文	常設展示室【縄文時代のタイムカプセル 日暮里延命院貝塚】コーナーに出土品展示中
2	西日暮里 4 丁目 1 ~ 7、5 丁目 38 周辺	道灌山遺跡（集落跡）	縄文・弥生・奈良・平安・中世・近世	常設展示室【くらしやすい台地道灌山遺跡】コーナーに出土品展示中
3	南千住 3 丁目の一部	石浜城跡（城館跡）	中世	常設展示室【石浜城と合戦】コーナーで石浜城について展示中
4	南千住 5 丁目 21・22	—（寺院跡）	近世	常設展示室【火葬寺と御仕置場】コーナーに出土品展示中
5	南千住 3 丁目 28 ~ 40 周辺	真先銭座跡（銭座）	近世	常設展示室【近代工業のあけぼのー真先銭座ー】コーナーで真先銭座について展示中
6	南千住 2、3、4、5、7 丁目の一部	小塙原刑場跡（刑場跡）	近世	常設展示室【火葬寺と御仕置場】コーナーで小塙原刑場について展示中
7	町屋 4 丁目 1 ~ 4、13 ~ 18 周辺	町屋四丁目実揚遺跡（包蔵地）	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世	常設展示室【あらかわの原始】コーナーに出土品展示予定

現在、区内では町屋四丁目実揚遺跡を含め七ヵ所の包蔵地があります。

周知の埋蔵文化財包蔵地内で、住宅の建て替え、ビル建設など開発工事をするときには、文化財保護法により、工事の前に届出が義務付けられています。

その後、試掘調査を行い、遺跡の有無を確認し、土中に残っている遺跡が工事によりやむを得ず壊されると判断した場合は、記録保存のための発

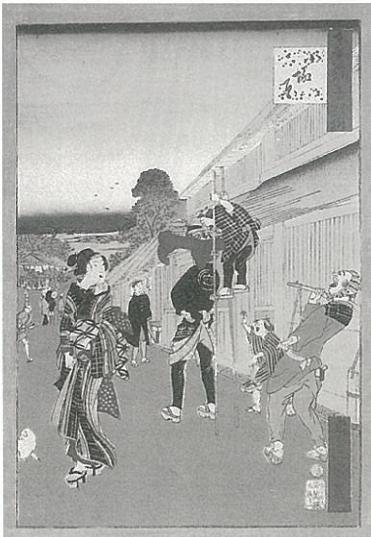
掘調査が行われます。詳細は荒川ふるさと文化館までお問合せ下さい。



## 今日のこの人①

## —錦絵の中の主役・脇役—

ここは明治 5 年（1872）の小塙原。日光道中（現在のコツ通り）沿いの旧千住下宿あたりのある日の風景です。昨年散髪令が出されたにもかかわらず、町を往き来する人のほとんどが丁髷姿。おや、なにやら笑い声が聞こえてきます。二階屋の旅籠屋の前で、お座敷に立派な「台のもの」（料理）を運ぶ途中、竹馬で背後から忍び寄った子どもが頭上のご馳走をむしやむしやと食べています。これを見たまわりの人たちは大笑い。気付かぬは仕出し屋の男ばかりなり



●小塙原「東京名所三十六戯撰」昇斎一景画（当館蔵）

という所でしょう。左の女性は、小塙原町の飯盛女。緋縮縫長襦袢の裾をのぞかせたその立ち姿は、小塙原町を象徴しています。

ところで、本日ご紹介したいのは、やや小さく描かれた、唯一「散切り頭」の若い男性です。鳶コートを羽織り、股引に草履を履いて、蝙蝠傘を手にしたその姿は、むしろ滑稽なくらい異様な風体。絵師昇斎一景の焦点はここにあったのかも知れません。まだまだ江戸の色を濃く残す小塙原町です。

〈野尻かおる〉

## 第 28 回 あらかわの伝統技術展 のお知らせ

今年も職人の祭典「あらかわの伝統技術展」を開催します。区内外の職人さんにご参加いただき、江戸・東京に伝わる伝統工芸技術の粹をご紹介します。

また、今年は荒川区文化財保護条例制定 25 周年、荒川区伝統工芸技術保存会結成 25 周年の節目の年にあたります。それを記念して、職人さんや伝統工芸技術に関するシンポジウムも開催します。詳細は、あらかわ区報やポスター、荒川区ホームページ等でお伝えします。

- 日時 9月 7 日（金）～9 日（日）10 時～17 時
- 会場 荒川総合スポーツセンター  
(荒川区南千住 6-45-5)

### ●シンポジウム●

- 日時 9月 7 日（金）18 時～
- 会場 サンパール荒川小ホール  
(荒川区荒川 1-1-1)

## 文化館でお買い物

今回ご紹介するのは、江戸やあらかわで栽培されていた野菜の絵の「ぼち袋」。カラ一刷です。いずれも江戸時代の本草学者岩崎灌園が著した『本草図譜』という本に掲載されている絵の中から野菜を中心に選びました。

常設展示室入り口で販売しています。



●生姜 清水夏大根 にんじん 春菊 潬菜  
5袋 1組 ¥250

### 訃報

●荒川区指定無形文化財（桐たんす）保持者、川俣善七氏（享年 99 歳、東日暮里）は、去る平成 19 年 3 月 4 日に逝去されました。  
謹んでご冥福をお祈りいたします。